

●水環境・モデル (2) (3-C-11-1～3-C-12-1)

本セッションでは、6件の発表申し込みがあり、その内5件が発表された。発表された内容および質疑応答の要約は以下の通りである。

3-C-11-1 では、前セッション（水環境・モデル (1)）で発表された 3-C-10-1「環境改善・悪化スパイラルを表現する内湾複合生態系モデルの開発」を東京湾に適用した結果が報告された。モデル解析の結果、単に流域からの負荷量の削減を継続しても課題の解決にはなりにくく、生物生産の「豊かな海」を再現するためには干潟・浅海域を修復することが重要であることが明らかとなったことが重要であると考えられる。

3-C-11-2 では、琵琶湖北湖を対象として難分解性有機物の漸増傾向要因をモデル解析により再現した結果が報告された。湖内生成が陸域からの流入負荷と同程度となり、前者の方が難分解性有機物の比率が多い結果となったことが発表された。これに関しては、多くの質疑応答がなされた。このモデル解析結果の妥当性については、今後の実証研究の積み重ねが待たれる。

3-C-11-3 では、陰イオン界面活性剤の直鎖アルキルベンゼンスルホン酸 (LAS) と抗菌剤であるトリクロン酸を対象として、生物分解性および光分解性を測定し、さらにこれらの結果を実際の河川流域に提供し、その挙動を解析した結果が報告された。生活関連汚染化学物質については、現在その分布と挙動を把握しようとする研究が盛んに実施されている。今後は現状把握に留まらず対策等を含めた次のステップへと研究を進展させる努力が期待される。

3-C-11-4 では、産総研で開発された水系暴露解析モデル (AIST-SHANEL) を全国レベルへと拡張する方法についての発表があった。今後は更なる流域情報を取り込むこと、観測データが存在しない物質に妥当性について検討すること等を通じて更なる研究の進展が期待される。

3-C-11-5 では、大分県における炭水産緑藻類カワノリの生育水環境について検討した結果が報告された。現場での観測を下に多くのパラメータから重要なものを抽出しようとした研究である。今後、実験室内のコントロール可能な状態での研究等が進めば、カワノリ生育に重要な条件が明らかになるものと考えらる。

(京都大学大学院工学研究科 清水 芳久)